

# SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

## 増殖する銀行手数料 (データに見るその現実)

近年、銀行は色々な手数料を新たに設けている。その内容には時々驚き呆れるものもある。

最近、ある社長から、過去に設定された担保を抹消するため必要書類(契約解除証と云う)を銀行に依頼した所、手数料として5千円(税別)を要求されたと聞いた。当然乍ら、貸出金保全のために担保を要求し設定したのは銀行の都合である。その借入金が完済した時、担保を解除するのは銀行の義務ではないか。私はそう思うが、それにさえ銀行は手数料を要求するようになった。

これも最近の話だが、小売業を営んでいる方から「1円玉両替手数料」の高さを嘆く声を聞いた。その方の云うには、先ず両替機を利用するための両替専用カード(1年有効の利用券)を求めるのに15千円(税別)かかる。そのカードを使って1円玉を両替すると更に両替手数料がかかる。具体的な金額は忘れたが、1年玉を10本(500円)両替するためにはかなりの手数料になるという。両替は銀行の固有業務だと思うが、ここにも莫迦高い手数料を設定するようになっている。

そこで銀行手数料の実態を知りたくなり、ネット検索で「両替手数料」と入れてみた。すると、驚くことに64千件を超えるサイトが対象として出てきた。大部分が金融機関の手数料関係のサイトであるが、全部見ていると日が暮れてしまうので幾つかのサイトに接続してみた。なるほど、成る程、実に色々な手数料が載っていた。確かに担保解除に手数料を取る銀行もあった。両替専用カードだけ有料の銀行もあった。サイトの一部を見たのだが、銀行は考えつく限りの手数料を設けている、手数料は銀行によって異なる(公取との関係か)、安くなるべき手数料も高止まりしている、等が指摘できるように思った。

ここ何年か、銀行が手数料強化に走ってきた。貸出金利息収入依存体質を変えるという名目の下、上記のような各種手数料の新設ばかりでなく、投信や保険等の販売委託手数料、プロジェクト融資やM & A関係等投資銀行業務にかかる手数料の強化を推進してきたと云われている。しかし、その実態、その本当の所はどうか。

金融ビジネス最新号に銀行130行の各種デ

ータが掲載されているが、その中に「手数料比率」(利益に占める非金利収入の比率)があったのでその一部を下に転記してみる。

	銀行名	16/3期	17/3期	増減
3	UFJ信託	30.8	37.9	-0.9
7	みずほ銀	15.9	21.7	5.8
8	三井住友銀	15.7	20.8	5.1
9	東京三菱銀	18.2	20.3	2.1
42	千葉銀	12.0	11.9	-0.1
45	りそな銀	12.3	11.5	-0.8
72	千葉興業銀	8.0	8.7	0.7
78	京葉銀	5.0	8.0	3.0
123	茨城銀	0.5	0.4	-0.1

(順位は17/3期、単位：%)

全部ではないので分かりにくいかもしれないが、元々手数料収入の多い信託銀行が上位にある、大手銀行は着々と手数料収入を増やしている、地銀は全体に拡散、大手・都市圏ほど手数料比率が高く地方ほど低い傾向がある、等が指摘できるように思った。手数料、手数料とお題目は唱えているが、その実績には想像以上の格差がある。特に、地方の地銀、下位の地銀は手数料確保で苦戦しているようだ。販売手数料や投資銀行業務は少なく、冒頭に書いたような単純だが不愉快な手数料は顧客に受け入れられていないのが実情ではないのだろうか。

とは云え、銀行は手数料増収に懸命になっていることは間違いない。だが、利用者としては、販売委託や投資銀行等周辺業務で発生する手数料は別として、銀行固有の業務(預金、貸出、為替)に手数料を新設したり、値上げしたりすることには大いに抵抗を覚える。固有業務で発生する手数料は銀行という許認可業種だから許される類の手数料ではないか。単価引き下げ、値下げで苦しむ企業からすれば、何とも安易で顧客軽視の手数料に思えてしまう。口を開けば「顧客第一主義」「地域のために」を唱える銀行は、その辺をどう考えているのだろうか。

中小企業は借入金にかかる金利負担だけでなく各種手数料負担も頭に入れなければならない時代に入った。銀行員が、「融資金額の1%が取扱手数料となります」等と臆面もなく云うようになったのだから。